

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：13902

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13869

研究課題名（和文）アメリカのK-2探究的学習理論・実践を活かした生活科探究的学習理論・指導法の確立

研究課題名（英文）Construction of Learning Theory and Instructional Method of Inquiry-Based Learning in Living Environment Studies Utilizing Learning Theory and Practice of Inquiry-Based Learning for K-2 in America

研究代表者

西野 雄一郎 (Nishino, Yuichiro)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00850398

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：令和2年度においては、アメリカにおける幼児期（8歳頃まで）の子どもたちによる探究型学習の実態について調査し、その成果は日本生活科・総合的学習教育学会の学会誌である『せいかつか&そうごう』に採録された。令和3年度は、低学年期の探究の理論と実践の系譜について明らかにすること、アメリカで実践されているプロジェクト・アプローチにおいて低学年期の探究が重要視される理論的根拠について明らかにすることに重点をおいて研究を進め、その成果はアメリカ教育学会の学会誌『アメリカ教育研究』に採録され、その成果は令和4年度に刊行した『資質・能力時代の生活科 知性と社会性と情動のパースペクティブ』（三恵社）に収録した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、生活科における探究についての理論基盤についてはあまり論じて来られなかった。本研究においては、生活科探究的学習理論を構築するための知見をプロジェクト・アプローチや新教育の動向より得ることができた。生活科は他教科と異なり、親学問がないことについてよく批判される。しかし、本研究成果において、盤石な理論的基盤を有するプロジェクト・アプローチと特質が類似しているということが明らかになったことにより、生活科の意義をプロジェクト・アプローチの理論や実践を媒体として問い直す機会を獲得したといえるのではないかと。

研究成果の概要（英文）：In 2021, I investigated the actual state of inquiry-based learning by children in early childhood (up to age 8) in the U.S. The results were published in The Japanese Journal of Education for Living Environment Studies and Integrated Studies. In 2021, we focused on (1) clarifying the genealogy of the theory and practice of inquiry in the early grades and (2) clarifying the theoretical basis for the importance of inquiry in the early grades in the project approach practiced in the U.S. The results of (1) were published in the journal of the American Educational Association for The results of (1) were published in American Educational Research, and those of (2) were included in the book; Living Environment Studies in the Age of Qualities and Abilities: Intelligent, Social, and Emotional Perspectives (Sankeisha), published in 2022.

研究分野：生活科教育 総合的な学習の時間

キーワード：生活科 プロジェクト・アプローチ J.L.メリアム ミズーリ大学附属初等学校 アメリカ教育 探究  
低学年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

学習指導要領(平成 29 年告示)には、「活動あって学びなし」という批判のある生活科学習の中でどのような思考力等が発揮されるかを十分検討する必要があることが記された。また、これに対して例えば、「試す」、「見通す」、「工夫する」などの学習活動を行うことが重視されることになった。これらの学習活動は、子供たちの思いや願いを実現する過程で、主体的に問題解決(探究)することによって必然的に生じるものである。生活科学習における思考力等育成において、探究が大切になってくるといえる。しかし、「探究」というワードは、中学年以降において次期指導要領におけるキーワードになっているにもかかわらず、生活科ではあまり重要視されてこなかった。生活科における探究に関する研究が少ない理由としては、探究が発達段階的に低学年に適していないと判断されることが考えられた。しかし、実際にアメリカでは、幼児期や低学年期における探究型学習実践が多く行われていた。

### 2. 研究の目的

アメリカには生活科という教科は存在しないが、低学年段階の子供たちが探究的な学習の中で有意義な学習効果を得ており、同じ低学年の教科である生活科においても、探究による有意義な学習効果を得ることができると考えた。生活科における探究の有用性を検証し、その学習効果を理論化し、その学習効果を得るための指導法を明らかにすることを本研究の目的とした。

### 3. 研究の方法

研究の方法としては、アメリカの幼児期から低学年期の子どもたちによる探究的な活動への従事を促進する教授・学習形態とされるプロジェクト・アプローチに関する理論と実践を、それに関わる文献等から明らかにし、我が国の生活科における探究のあり方への示唆を得る方法をとった。

一方で、本研究の過程において、生活科がその系譜に位置づく新教育の動向についての解明の必要性を強く感じ、アメリカ新教育の一端を担った J.L.メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発についての文献研究をすることによって、生活科の理論基盤を探る方法をとった。

### 4. 研究成果

令和 2 年度においては、アメリカにおける幼児期(8 歳頃まで)の子どもたちによる探究型学習の実態について調査した。具体的には、1980 年代に L.G. カッツと S.C. チャードによって紹介されて全米中に広められ、多くの実践事例を有するプロジェクト・アプローチの理論と実践について文献調査した。プロジェクト・アプローチは、20 世紀初めのデューイやキルパトリックの着想を基盤としながらも、現代の発達心理学や脳科学も理論基礎に取り入れた教授・学習アプローチであることが明らかになった。プロジェクト・アプローチは、今では中学校段階の子どもに対しても用いられているが、元々は幼児期(8 歳頃まで)の子どもたちへのアプローチだった。よって、プロジェクト・アプローチの理論は、低学年段階の子どもたちを探究へと導くものであると考えた。

プロジェクト・アプローチの探究を支える重要な要素の一つに「協同性」が挙げられた。プロジェクト・アプローチにおける「協同性」とは、「全ての子どもがグループ全体に貢献することが期待され、奨励されるその状況において、一人ひとりが共有した目標を叶えるために作業をする。また、そのお互いの努力がお互いの作業を刺激し合い、学び合う。その結果、共有の成果を最大限にできるようになる。」と定義することができた。

我が国の生活科において軸となるのは、具体的な活動や体験を通して子どもたち自身が思いや願いを実現していく学習過程である。プロジェクト・アプローチに学ぶのであれば、その思いや願いが友達同士の共通のものとなることが期待される。共通の思いや願いが生まれることによって、「協同性」を発揮する場面が生じ、その諸要素をアセスメントすることが可能になると考えた。

令和 3 年度は 低学年期の探究の理論と実践の系譜について明らかにすること、アメリカで実践されているプロジェクト・アプローチにおいて低学年期の探究が重要視される理論的根拠について明らかにすることに重点をおいて研究を進めた。

について、生活科の源流は 20 世紀初頭のアメリカ新教育に求められることが多く、その時代に盛んになった子ども中心の教育と生活科教育との親和性の高さを明らかにしてきた。子どもたちの生活世界に対する興味から派生する探究的な活動を重要視する子ども中心の教育は、しばしば「学問軽視」であったり「無計画」であったりすると批判されてきた。しかし、決して子ども中心の学校全てがそうではなかったことを本研究で明らかにした。例えば、J.L.メリアムが指導したミズーリ大学附属初等学校における実践は、あくまで子どもの現時点における生活を豊かにすることを目標としながらも、結果的に学問的な知識を獲得することを可能にしていたことを明らかにした。

について、プロジェクト・アプローチにおいて早期段階の探究が重要視される理由は、この時期の子どもたちの観察したり調べたりする心的傾向を涵養することは、その後の人生の全ての段階における探究的な態度につながるということが明らかになった。また、学級の子どもたち一人ひとりが共通の目標に向かって探究し協働する中で、子どもたちの後の人生を豊かにする社会性や情動性が涵養されることも明らかになった。

令和4年度においては第1に、『資質・能力時代の生活科 知性と社会性と情動のパースペクティブ』（三恵社）を刊行し、その第2章と第6章に研究の成果を記した。第2章では、アメリカの幼児期の教室において協同的な探究的学習形態を採用するプロジェクト・アプローチの理論と実践について記載した。その章において、情動が探究的な態度の形成に関与すること、また、プロジェクトにおける協同的な問題解決が社会的コンピテンスを促進し、その社会的コンピテンスが更に探究的な態度を涵養することなどを提示した。第6章においては、探究的な学習において涵養され得る知性、社会性、情動をどのように見取るのか、探究的な学習における評価のあり方について検討して記載した。

第2に、ミズーリ大学附属初等学校における領域「観察」に関する研究を行った。新教育運動の系譜の中に位置付けられる生活科の探究的な学習形態は、同じく新教育の系譜に位置付くメリアムによるミズーリ大学附属初等学校における総合教科である「観察」と類似している。その「観察」の理論と実践を分析し、生活科教育のあり方に若干の示唆を述べた。

本研究において、当初予定していた学習教材の作成・実践・検証には至らなかった。それでも、生活科探究的学習理論を構築するための知見をプロジェクト・アプローチや新教育の動向より得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 西野雄一郎	4. 巻 32
2. 論文標題 J.L.メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発 教科「物語」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アメリカ教育研究	6. 最初と最後の頁 74,96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西野雄一郎	4. 巻 7
2. 論文標題 J.L.メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発 「手仕事」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要	6. 最初と最後の頁 95,102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西野雄一郎	4. 巻 18
2. 論文標題 プロジェクト・アプローチの歴史的変遷に関する研究 二項対立の枠組みを乗り越えるアプローチの事例検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生活科・総合的学習研究	6. 最初と最後の頁 41,48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西野 雄一郎	4. 巻 28
2. 論文標題 幼児期における「協同性」の生活科学学習への接続に関する研究：プロジェクト・アプローチにおける「協同性」からの示唆を生かして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 せいかつか&そうごう	6. 最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西野 雄一郎	4. 巻 70
2. 論文標題 ミズーリ大学附属初等学校におけるJ.L.メリアムの実験に至る問題意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告. 教育科学編	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西野 雄一郎	4. 巻 6
2. 論文標題 J.L.メリアムによる伝統的カリキュラムへの批判	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西野 雄一郎	4. 巻 11
2. 論文標題 ミズーリ大学附属初等学校における領域「観察」に関する研究 - メリアムによる理論基盤構築の解明と教師の実践分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 J.L.メリアムの伝統的なカリキュラム批判に関する検討 バグリーの形式陶冶に関する見解との比較を通して
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 社会的効率主義とJ.L.メリアムとの関係性
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 J.L.メリアムのカリキュラム実践へのデューイの影響
3. 学会等名 日本デューイ学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 メリアム実験学校の領域「観察」に関する研究
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム実践 学科「物語」に着目して
3. 学会等名 アメリカ教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 幼児期の探究的な活動を促進する環境構成に関する研究
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発に関する研究 「手仕事」に着目して
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西野 雄一郎
2. 発表標題 J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校における実験・領域「遊び」についての研究
3. 学会等名 アメリカ教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中野真志・西野雄一郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三恵社	5. 総ページ数 189
3. 書名 資質・能力時代の生活科 知性と社会性と情動のパースペクティブ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------